

会議録

開催日時	平成29年10月25日（水）午後2時から午後3時45分
開催場所	西尾市クリーンセンター研修室
出席者	委員：別紙名簿のとおり（欠席者：折出委員、中山委員） 事務局：永谷環境部長、牧環境部次長、鈴木環境保全課長、黒野主任主査、三矢主任主査、鈴木主事
会議名	第2回西尾市産廃処理施設建設計画影響調査研究会
内容	<p>司会進行 事務局</p> <p>1 あいさつ 会長の片山でございます。本日第2回目の西尾市産廃処理施設建設計画影響調査研究会を開催いたしたいと思っております。 本日、次回、次々回で各委員から、専門的な立場からこの建設計画についての問題点、その他をお話しいただきたいと思っております。 専門分野からの色んなお話を聞いたうえで、最後には研究会としての総合的なまとめをしていきたいと思っておりますので、よろしく願いいたします。 各委員におかれましては、前回の研究会で、野田委員につきましては、個別に現地を見ていただいております。それらを踏まえたうえで、専門的なご講演を3回にわたり行う予定です。 議事の前に、前回の研究会から今回の研究会までの期間において、事務局から委員に知らせるべきことがございましたらお願いします。</p> <p>2 議題（1）経過報告について 事務局から以下の2点について説明 ・産廃処分場問題に係る広報掲載について ・西尾市議会の平成29年9月定例会における産廃処分場問題に関する一般質問について</p> <p>2 議題（2）周辺環境への影響等に関する委員発表について 「一色町に生息する野鳥」：高橋伸夫委員 （パワーポイントで資料を表示しながら説明） 高橋です。よろしく願いいたします。 野鳥の点から一色町、竹生新田がどのようなところかを説明させていただきます。 私は、環境省の希少野生動植物種保存推進員や全国で7人程度のモニタリングサイト</p>

1000シギ・チドリ類調査検討委員を中部地区の代表としてやっております。

愛知県では、環境審議会自然環境保全部会の委員、絶滅危惧種等調査検討委員会の鳥類担当をしております。また、鳥獣保護管理員、企業庁のトヨタ自動車新研究開発施設環境監視委員もやっております。

西尾市では、環境審議会等の仕事をしておりますので、そのような立場からお話をさせていただきます。

まず、一色町で確認されている鳥類は、271種、全国では633種。僅か23km²程度の一色町の面積で、日本で確認されている鳥類の4割以上の種類が確認されている。これは1970年から現在までに西三河野鳥の会が記録したものです。

一色町の沿岸部は、海拔ゼロメートルあるいはそれ以下の干拓地が広がっている。鳥の生息地は、一色干潟と干拓地内の水辺が主体で山の鳥は少ないが、それでもこれだけ多くの種類が確認されている。

国内、県内には、水鳥の集まる塩水の干潟はまだ残されているが、沿岸部の汽水や淡水に住む水鳥の生息環境は、極めて少なくなっている。西尾や碧南の海岸はほとんど埋め立てられ、一時は埋立地にできた淡水や汽水の水辺にたくさんの野鳥が集まったが、現在その環境は全て無くなっている。一色町に水鳥が多いのは、干潟とともに広い除塩水路や養魚場跡があり、沿岸部にある淡水や汽水の水辺を生息地とする種類の鳥が住める環境が残されている日本でも非常に貴重な場所であることによる。

次に一色町の主要な水鳥類について、代表としてクイナ類は一色町7種、全国は絶滅種などを含めて14種。シギ・チドリ類は一色町60種、全国78種。このように種類数の多い場所は全国でも極めて稀有である。

アメリカヒレアシシギは、アメリカでも数の多い鳥ではないが、日本で確認された記録は2例のみで、その2例ともが一色町である。このような珍しい鳥は、離島や外洋に面した場所で確認されることが多いが、本州のしかもその中央の湾内で確認されていることから一色町の特異性が分かる。

これは、昔の実禄の塩田跡の写真。このように鳥がたくさんいた。

これは、珍鳥シベリアオオハシシギの写真。以前は毎年幼鳥が一色町に飛来していたが、そのような場所は国内で他に例が無い。これは、一色町で写した写真でカラフトアオアシシギ。世界に数百羽しかいない鳥です。こちらは、ヘラシギ。どちらもいつ絶滅してもおかしくない鳥で、竹生新田でも確認されている。

愛知県では、1967年から野鳥の定点調査を行っている。水辺での調査は、鍋田（弥富市）が一番始めて1970年から行われている。矢作川河口（西尾市）が1972年から、汐川河口（田原市）が1974年から、庄内川河口（名古屋市）が1992年から行われている。庄内川河口は、問題となった藤前干潟のあるところで、問題になってから調査を始めた。現在、愛知県の沿岸部である程度の広さがあり水鳥が多く飛来する場所は、この4箇所と一色町の沿岸部のみ。

ヒクイナ、クイナ、バン、オオタカ、アカアシシギ、エリマキシギ、キリアイ、オジロトウネン、コアオアシシギ、シマアジについて資料に基づき説明。

ハイロチュウヒは、元々鍋田に多かった鳥だが最近は一色町で多く見られる。冬になると計画地周辺にカメラマンが多くいるのは、この珍しい鳥の写真を撮るために来ている。グラフをみると、矢作川で確認されているが、これは一色町で確認されているものが矢作川でも確認されているものである。

次に、以前は数が多く普通の種であったが、現在は激減して絶滅が危惧される種を説明。これらは、湿地が埋め立てられて最近急激に数が減った鳥です。

オグロシギ、ツルシギ、タカブシギ、ウズラシギについて資料に基づき説明。

セイタカシギは、国、県ともに絶滅危惧Ⅱ類の鳥。以前は、全国で数十羽程度しか確認されない種で

あったため、国で絶滅危惧 IB 類に指定されていたが最近増えたため絶滅危惧 II 類に変更された。

国内に生息するセイタカシギの総数は、春秋冬の全国一斉調査の数で 2014 年には 183 羽、2015 年には 127 羽である。竹生新田では 2014 年の最大数が 47 羽、2015 年には 49 羽。全国の生息数の 1/4 から 1/3 以上が産廃施設の建設予定地である竹生新田に集まっている。

セイタカシギの繁殖成功率は極めて低いが、一色町では毎年繁殖が確認されている。

今年、全国でセイタカシギの孵化が確認された場所は、全国で東京湾と三河湾のみである。孵化が確認されたヒナの数は、東京湾で 28 羽。三河湾で 64 羽。三河湾で確認された 64 羽の内、55 羽が竹生新田で孵化したものである。

セイタカシギは、数が増えたため絶滅危惧 IB 類から II 類へ変更されたが、数が増えたのは長年一色町で繁殖が継続してきたからであり、その中で繁殖数が最も多く、現在も安定した繁殖環境が残されているのが竹生新田である。

竹生新田には、多い時は全国のセイタカシギの 30%以上が飛来しており、全国の 60%の孵化が確認されている全国で最も貴重な場所である。

産業廃棄物処理施設が実施された場合、セイタカシギの生息地や繁殖地が消滅するだけでなく、愛知県のみならず国内沿岸部の淡水や汽水域を生息地とする野鳥種の多くに大きな悪影響を及ぼすことは確実といえる。

産業廃棄物処理施設が竹生新田に建設された場合、セイタカシギが日本から絶滅する可能性は高い。

また、最近ハイイロチュウヒが越冬するためのヨシ原がいつの間にか業者に刈られてしまった。ハイイロチュウヒが日本に越冬に来る数は、せいぜい 10～20 羽程度。そのうちの 2、3 羽が越冬できる場所である。

鳥の観点から見た竹生新田は、全国でも非常に貴重な場所です。一色町内で他に環境の良かった場所の大半が失われた現状では、上手い方法で何とかするという事は無理であると思います。何とか産廃施設の建設を止めていただきたいと思います。鳥の関係からは以上です。

質疑応答

野田委員

絶滅危惧種等に指定されると、どのようなことが変わるか。

高橋委員

環境アセスを行う際に、絶滅危惧種を中心に調査を行うことになる。また、審査についてもそれらを中心に行うことになる。

野田委員

愛知万博の時に、絶滅危惧種が確認されたため建設予定地が変わったと記憶しているが、そういうこともありえるのか。

高橋委員

そうです。建設予定地でオオタカの営巣が確認されたため、主会場が変更された。オオタカは、守られたお陰で数が増えたため希少野生生物から外そうとしている。ただし、絶滅危惧種には変わらない。

鈴木委員

なぜ竹生新田に、貴重な鳥が特異的に来るのか。一番大きな理由は何か。

高橋委員

干潟は、藤前干潟のようにラムサール条約で守られている。当時は世間一般的にシギ・チドリといえ
ば干潟だと考えていたためであるが、実は沿岸部の淡水や汽水の水辺のほうが貴重な種や珍しい種がた
くさんいた。しかし、塩田跡地や養魚場跡地のような広い泥湿地が全国から消えてしまい、そういうと
ころでしか生きられない鳥が竹生新田に集まって来るからである。

木曾委員

アセスを行う際に、希少生物がいると制約条件になる。例えば、今回ご紹介いただいたようなデータ
は、どこかに公表されているか。民間がアセスを行う場合、公表されたデータが重要な資料になる。現
地調査を行う場合もあるが、頻度が少なく限られた条件でしか行えないので、このような貴重な資料が
公表されているか。

高橋委員

愛知県の鳥類調査に関しては、ホームページに掲載されている。

また、環境省のモニタリングサイト1000は、環境省に問い合わせただけであれば、情報がいただ
ける。西三河野鳥の会については、必要があればデータをお出しできる。

会長

モニタリングサイト1000では、1,000箇所定点観測をしており、その中で希少鳥類が竹生
新田で確認されているようだが、他の地域での観察状況はどのようなか。また、過去に確認されたが現在、
確認されない場所の土地利用はどのようなか。

高橋委員

モニタリングサイト1000は、日本の様々な環境について行われており、シギ・チドリについては
全国200箇所程度で調査を行っている。

浦安は、昔、非常に大きな干潟があったが現在は減っている。大阪湾も埋められてしまっている、九
州や沖縄には少し残っているが、その多くは開発の対象になっている。

会長

瀬戸内の塩田跡はどうか。

高橋委員

瀬戸内海で塩田があると思われる中国地方の調査結果を見ると、野鳥の種類数も生息数も一色とは比
べ物にならないほど少ない。

2 議題（2）周辺環境への影響等に関する委員発表について

「三河湾への影響」：鈴木輝明委員

（パワーポイントで資料を表示しながら説明）

今回の産廃処理施設の建設計画のある場所が、三河湾にとってどういう場所なのかということの説明
します。

まず、三河湾にはどのような魚介類がいるのかという事を説明します。

三河湾は、日本の主たる内湾の中で、単位面積あたりの漁獲量が一番多い。以前は、東京湾であった
が今は見る影もない。この地先もアサリの漁獲量が全国1位、アサリといえば一色というようになって

いる。他にも、一生を三河湾の中で生活をする種類としてシャコやナマコなどがある。また、三河湾の中で生活をするが、やや行動範囲の広いガザミ。これは、年の漁獲変動が非常に大きいので、ずっとではないが、たまに全国1位。クルマエビは、県の魚だが最近非常に数が減っており三河湾で幻の魚のような感がある。これは干潟に非常に強く依存する種で、三河湾の海の底の酸素が欠乏する貧酸素化が、一番大きな減耗要因であると言われている。それから、伊良湖水道で生まれ、大きくなる過程の中で索餌回遊と言って三河湾、伊勢湾の中のエサを食べながら大きくなり外海の産卵場に戻っていくという種類でトラフグがいる。トラフグといえば下関の南風泊が一番有名で、フグといえば下関と言われるが、実は漁獲高からいくと愛知県が1番。下関が不漁の時は、山口や九州の船が愛知県の赤羽漁港を基地に愛知県の漁場で操業するということがあり、漁業者間で激しいトラブルがあったこともあるぐらい三河湾、伊勢湾に強く依存する種類である。梅雨が開ける頃に、名古屋港の中で網を入れると5、6cm位の稚魚がとれる。トラフグは外海の魚と思われがちだが、内湾に依存する。

こういう魚が、どの様に分布しているのかということ、県の水産試験場が調査したものがある。

水の中に溶ける酸素は、水温が高いとあまり水に溶け込まない。飽和度30%が生息限界で、それを下回ると魚介類は、酸欠になり死亡または逃避する。三河湾の夏は、東半分の渥美湾と衣浦湾の奥の美浜地先が顕著に貧酸素化をして、ここの魚介類は全て死亡または逃避する。唯一残っているのは、一色干潟。一色干潟の全面から湾口にかけてのエリアが、三河湾で最も環境が良い場所で、魚は全部ここに集約されてくる。貝、エビ、カニ類の夏の主たる分布域は一色干潟の地先から湾口にかけてである。先ほど高橋委員から鳥の話がありましたが、海の主要な魚介類も一色の地先が三河湾の中での主要な生息場になっている。現在、酸欠のエリアを何とか改善しなければいけないということで、干潟や浅場の保全などの様々な対策を県や国が講じている最中である。

これは、西尾市からいただいたデータで、津波が起きた場合にどの程度の浸水が起こるかというハザードマップ。計画地周辺は、2～4mの浸水が予想されていて津波の到達時間も30分から1時間程度で到達すると予想されている。最大震度分布も6弱から6強でかなり大きい震度が予想されている。もう1つ重要なのは、地震に伴う液状化のリスクが極めて高いと言われており、このエリアは内湾といえど、大型の地震に伴う津波が生じた場合、十分に浸水する可能性があるということ、なおかつ震度による液状化によって護岸等が破損する可能性があるエリアである。

先ほども説明した通り、三河湾というのは、日本で最も生産性の高い内湾であるが、その主たる生息域、漁場はこの計画地の目の前にあるわけで、現実に水産庁の漁場100選のなかで、内湾の浅い漁場で選ばれているのが一色干潟エリア。これは、旧矢作川の河口にできた河口干潟で、非常に良質な砂が地下にあるが、逆に液状化のリスクも非常に高いところである。

この地域から人体や生物に影響が出そうな何らかの汚濁物質が、地震等で堤防が壊れたり、浸水で内部のものがめぐり出されたりしたような場合を想定し、どこまでそれが広がるのかというシミュレーションをした。仮定としては、一色の当該地区から濃度100の何らかの汚濁物質が漏洩したとし、それが5日間漏れたとする。場合によって1か月漏れることもあるし、早急に仮設堤防等によって対策し漏洩を防止できるかもしれないが、5日間漏れた仮定し、漏れてから10日間どこまで広がるかを計算した。計算方法は、3次元の流動モデル。水平方向と鉛直方向を同時に計算するモデルで、これは海域の計算において一般的な計算方法になっている。三河湾には県の自動観測ブイがあり、時々刻々の流や水質をモニターしており、それにあっているかどうかの再現性の検証は成されている場を利用して、その時の風、潮位、川の流量等を加味して再現した。想定は2014年1月と2017年8月。(計算結果を画像で可視化して説明)

濃度100の何らかの汚濁物質が5日間漏洩したとし、濃度が1000分の1になるエリアは図のとおりである。1000分の1というと、ものすごく薄いように思われるが、例えばダイオキシンのような非常に毒性が高いと言われるものが流れ出た場合は、1000分の1濃度は高い濃度であり、生物に蓄積されると魚は売れなくなる。拡散範囲は夏場のほうが広い傾向にあるが、どちらも三河湾内に拡散している。

今回の産廃計画については、この地域の漁業者の団体の方も市に要望を出されておると聞いているが、伊勢湾も含めた愛知県全域の愛知県漁業協同組合連合会も一色町の問題について抗議文を県知事に出されていると聞いている。

その理由は、一旦ここで何か起こってしまうと、三河湾の主要な漁場が使えなくなる可能性がある。つまり、たった5日間漏れ出しただけで、魚が捕れても汚濁物質の蓄積や風評被害等で漁場が使えなくなることが予想されるため、何とかしてほしいという要請を挙げられている。

東海、東南海地震のような巨大地震が来た場合に当該地区は、液状化の懸念が極めて高いということ、内湾といえども津波の襲来により2m～4m程度の浸水の恐れが有るということ、また、液状化の可能性も有る。これらの状況下で、何らかの汚濁物質が5日間程度海域に流入した場合、10日間で当該地区の地先のみならず、現在の主要漁場である三河湾西部から湾口にかけて広がる可能性が危惧される。

話は少し変わるが、アサリは、愛知県が全国1位でシェアは6割から7割。全国のアサリ漁獲量は右肩下がりです。1980年くらいからずっと下がっているが、愛知県の漁獲については、凸凹はあるが最低1万トン、豊漁時には2万トンを超える漁獲があった。1万トンまで減った時に、これを回復しようということで、国、県が協力し全国で初めて約620haの大規模な干潟、浅場の造成を行った。また、漁業者も稚貝の移植放流を大々的に行い、豊川河口の六条干潟で獲った稚貝を自分たちの地先の漁場に撒いた。干潟浅場の造成という場の確保と稚貝の移植放流という漁業者の方々の努力で、急激に漁獲が2万トン程度まで回復した。しかし、それ以降微妙に減少傾向が続き、平成26年くらいから急激に漁獲高が減少し、現在は3,000トンくらいまでに減っている。この理由が何なのかということ、色々な方々が調査をしており、様々な意見がある。例えば、平成26年は、台風がたくさん来たとか、害は無いが貝に特異的に寄生するカイヤドリウミグモがついたからだとか言われているが、私はこの減少の原因は、人為的な要因がかなり強いと思っている。

愛知県のアサリの漁獲量のほとんどは、この西三河地域で採られているが、これが平成26年から急激に減ってきている。偶然かもしれないが、リン酸濃度の低下がアサリ漁獲量の低下と一致している。

伊勢湾では、三河湾よりも早くアサリの漁獲量が減少している。その理由についてかなりの調査がされており、その結果と同じようなことが三河湾で起こっている可能性があると考えられる。

公共用水域N12地点、中部国際空港の南に位置する小鈴谷という地区の干潟の植物プランクトンの量の推移をみると、変動しているがかなり急激に植物プランクトンの量が減っている。平成26年に三河湾で一番アサリが減った時期に、実は伊勢湾でもアサリが減った。平成26年6月くらいに一色干潟でも大量にアサリが死んだ。普通、アサリは、夏の猛暑の時期や酸欠の水が上がってきた時期に大量に斃死するということがあるが、6月に死ぬということはずなかつた。平成26年6月の植物プランクトンの濃度が6.3ppb。平成20年くらいは、今の約1.63倍。平成15年くらいは、今の2.2倍位あったので植物プランクトンが急激に減っているのが分かる。

植物プランクトンが減っていることが、アサリの斃死の原因なのかということ整理した。

アサリの殻の中の軟体部の重量を予測する式がある。アサリが死んだのが平成26年6月。植物プランクトンの量が炭素で計算してあるが、実測値をベースに再現性をとって生態系のシミュレーターで演

算したものを使用している。4月くらいにアサリの中身が2グラムくらいであったものが、植物プランクトンが減ってくるとエサ不足でアサリが痩せてくる。この赤いラインが、アサリの生息限界ライン。アサリは、肉質重量が減ってくると砂の中から這い上がってきて潜らなくなり、波打ち際に寄せられて大量に斃死する。これはエサ不足で、北海道のホッキ貝など色んな所で観測されている。この赤いラインを下回るのが計算上は、6月末から7月なので、アサリのモデルではある程度再現されている。

また、三河湾の水温は、ここ30年で最大2.7℃くらい上がっている。三河湾の中心では、1.5℃くらい上がっている。三河湾の海水温は1～2℃上がっている。同じエサ条件で水温が1℃低かった場合と2℃低かった場合の感度解析をしたが、温度によって斃死時期が大きく変わることは無い。水温が低かったとしてもアサリの斃死状況は、それほど変わらないが、エサの濃度を2.2倍、1.6倍にして計算した場合は、アサリは死なない。生息限界ラインよりも上にいる。つまり平成15、20年くらいの植物プランクトン濃度であれば斃死は起こらなかった。そして現実には起こっていない。ところが、平成26年の植物プランクトン濃度では、アサリは痩せこけて死んでしまう。

色々な方が、海水温が高くなった事が原因と言うが、それも多少は有るだろうが、主たる原因はエサ。つまり、それだけ海が痩せてきたからでないかこの調査では結論付けている。これは、冬でも同じでこの海域では平成26年6月にアサリが全滅したので、秋に豊川から採ってきたアサリの稚貝を放流した。ところが、それも年を越せずに死んでしまった。これもエサ不足だろうと言われている。エサの濃度を過去の濃度にして計算した場合には、生き延びて冬を越し翌年の春まで生き延びる。どうもエサの濃度が、アサリの生息にとって適さない濃度になってきたのではないかと考えられる。

海の問題は、様々な要因で漁業者の方はご苦労をなさって漁獲量維持のために色々な工夫をされている。エサ不足の問題については、私は、解決の方法はあると考えている。先般の新聞にもあったが、矢作川流域下水道の一番海側の処理施設の排水のリン濃度を基準値内で現在よりも2倍くらいに上げたらどうかという社会実験を11月から行いモニタリングも県が行うということになっているようなので、そういったことが功を奏すると思う。伊勢湾についても、三河湾についても今は厳しい状況ですが、これだけ処理技術も発達しているので、冬の時期だけリンの濃度を2から3倍にするという負荷の付替えが可能だと思う。下水道の技術者の方々にそういうお願いをすれば、この危機的状況は何とかクリアできるのではないかと思う。

ただし、産廃の問題は今の状況下では、極力回避すべきではないかというのが私の意見でございます。以上です。

質疑応答

野田委員

汚染物質の濃度が100だと仮定した場合、それが1000分の1に減少する場合にという話があったがそれは100が200になった場合でも、同じようにその1000分の1になるということか。

鈴木委員

想定される汚濁物質の量がわからないので、相対値として1000分の1になる包絡線がどこまで広がるかという仮定です。仮に、汚濁物質の量を増やせば包絡線の範囲は広がるが、とりあえず100、0.1に設定した。

野田委員

さらに100倍あったら、現象としては同じ時間で100分の1くらいになるということか。

鈴木委員

そうです。

野田委員

漏洩を5日間に設定した理由は。

鈴木委員

何らかの局所的事故であれば、5日もあれば対策できる。例えば石油の流出事故は、大規模なものは別として、1週以内に止められる。今回はそういった瞬間点源の拡散を計算している。

しかし、ここの想定というのは、大地震が来て液状化してそれが全て流出するとなると5日では治まらない。つまり、永続的に出てくるのもっと恐ろしいことになる。

野田委員

第4回目の研究会で、私が液状化の話をさせていただくことになると思う。先ほど仰ったとおり、対象とする地域の表層は良質の砂でできているが、ここに作られている堤防は耐震というよりも高潮対策として平成10年代の始めのくらいに造られたと思われる。そうすると耐震化という視点を前面にして造られていない可能性があるなので、注意を要する。

鈴木委員

野田委員が脆弱性の話を触れられたんですが、この話を西尾市の方から聞くと、今の産廃の埋まっている状況は、汚濁防止膜が展張されているようですが、汚濁防止膜そのものがかなり古くて劣化している可能性があるという様な話も聞いた。これも、こわい話だと思う。堤防自体の脆弱性と現在の埋まっている状態の脆弱性も加味すると、一旦大きなハザードがきたとすると、ほぼ確実に壊れるのではないかと、私は思います。

私が一番申し上げたいのは、この海域は、三河湾でも一番重要な海域はだということ。もしここが何かあると三河湾では漁業ができなくなるくらい重要な場所だということ。

木曾委員

これは、拡散計算であって分解や吸着は一切考慮されていないか。

鈴木委員

していない。

木曾委員

産廃埋立地の浸出水の水質で問題になるのは、難分解性のもや重金属類。そういうものは、拡散だけで議論ができる成分なので、参考にさせていただけると思っている。

会長

三河湾の矢作川の下流域で漁場として良いと言うのは、砂質が適しているということ。それがマイナス面を出るとすると液状化が起こるということ。産廃処理施設として、今の防波堤のままで利用されると小さな点で問題が起こったとしても、三河湾全面に広がると解釈したがよいか。

鈴木委員

はい。

会長

鈴木委員の方から、非常に重要な話をしていただいた。

そこで生計を立てている人がいるわけですし、我々日本人にとって良質な漁場というのを愛知県がど

う確保して見せるかということが1つの姿勢として大切になってくるのではないかと思います。

今日、高橋委員から鳥の問題、鈴木委員から三河湾の問題を話していただきました。どうもありがとうございました。次回は、木曾委員から水質について。もう1つは計画地のすぐ近くに学校がありますので、折出委員から教育と産廃処理施設の建設についての発表がされる予定です。

年明けには、野田委員と中山委員から発表をしていただき、その上で総合的な議論を進めたいと思います。今日の議事はこれで終わりますが、委員方の何かありますか。

なければ、次回の日程を事務局からお願いします。

3 その他

事務局から以下の2点について説明

- ・次回開催予定日について

調整の結果、平成29年11月29日（水）を開催予定とした。

- ・「事務局報告様式」について

事務局

以上をもちまして第2回西尾市産廃処理施設建設計画影響調査研究会を終了します。

ありがとうございました。

以上で会議終了 午後3時45分